乱世の武将と善教寺

宮下良明
（会員・佐伯市古江区）

善教寺はその昔、古市村栗本にあって、藩祖高政公の母堂、妙西尼の希望で一向宗（真宗）西派より、東派の末寺になった。

現在地の後田に移転した理由については、寛永十九年（一六四二）十二月佐伯藩に預けられて、二十八年間此の地に謫居（たくきょ）し病没した石川康長を埋葬した場所に、古市村栗本より大内に移っていた寺を移築したと、佐伯市史の中で善教寺歴に記し、また同書近世史編には「慶長十八年（一六一三）十月十九日、信州松本城主石川玄蕃頭康長は、伯耆守数正の子で徳川秀忠の側近として仕えていたが、大久保長安の不正がもとで佐伯に流罪となった」。と概略このように記しあまり多くを語っていない。

しかし、どうして佐伯毛利藩が康長の流罪先に決まったのか、時の幕府実力者の介入は無かったか等については触れてなく、依然として謎が多い。

これには複雑な戦国武将達の人間関係と、一向宗（真宗）信仰の歴史が潜んでいる事を見忘れてはならない。

次に示す各武将の系図一部分と、その関係を筆者の頭なりに要約して見た。

武田氏系図一部

二十六代
武田大膳大夫晴信（信玄）
- 太郎義信
- 二郎龍宝
- 三郎氏秀
  実は北條氏康の七男なり
- 二十七代四郎勝頼
- 五郎盛信
- 六郎望月
- 七郎葛山
- 女子
  北條氏政夫人
- 木曽義昌室
- 女子
- 女子
- 女子
- 女子

木曽氏系図一部

豊方（源太郎）―家方（左京大夫）―家豊（兵部大輔）―義元（左京）―義康（源太郎）

義昌（伊豫守）―女子（妻は武田信玄の娘）―毛利高政夫人
義昌―義利（母武田信玄女）
義昌―玉林（勝寺）

左馬守義昌は弘治元年八月二十三日武田氏に攻められて降り、信玄の息女を妻に迎えて武田氏の一族となったが、天正十年正月廿日勝頼に叛き、織田氏に通じた。義利は下総阿知戸に於いて一万石を領した。

佐々木氏系図

佐々木氏は、近江の国佐々木庄より起り、鎌倉以来殊に栄えて「古今稀に見る大族となれり、」と見え、その分流は数えきれない。

江濃を支配した三井・六角・京極・蒲生・浅井・鯰江・藤堂寺、いずれも佐々木氏に関係がある。

佐々木本流

秀義―定綱（太郎左衛門尉　山城守）―廣綱
秀義―経高（中務丞）
秀義―盛綱（左兵衛尉）
秀義―高綱（左衛門尉）―重綱
高綱―光綱
秀義―義清
義清―高重
義清―嚴秀

宗家は、江南六角江北京極の二流よりの分流。

信州松本、正行寺（石川康長と関係）

高綱の開基「臼杵市史」

石川氏系図

文安三年（一四四六）八月、本願寺蓮如上人と共に下野に下った。のち蓮如のすすめで三河国に移住して石川姓を名乗った。

義兼―朝成―氏房―泰信

政康―親康―忠輔

清康―康正―数正―康長（三長）真宗正行寺を栗林より松本城下に移す

家成―忠総（日田代官）毛利高政日田代官を石川主殿頭に受け渡す

鯰江氏系図　後　毛利氏

近江国愛智郡森村より起こり、佐々木大膳大夫満綱の男備中守高久（実は三井乗定の男）を祖とする。

- 高久　明應二年五月九日死す　備中守
- 尚昌　左近將監
- 義尭　出雲守
- 為定　相模守
- 定秀　又市郎備前守　母は稙綱が女　義尭が家督を継ぐ　妻は下野守久政の女
  - 貞治　相模守
  - 貞種　□之充
  - 貞豊　市助　又左衛門
  - 女子　山岡対馬守室
  - 女子　蒲生左兵衛大夫賢秀室
  - 女子　藤堂源助虎高室
  - 女子　犬上伊豆守政兼室
  - 女子　中村孫左衛門一成室
  - 定春　大長寺殿（大阪鯰江）助十郎備前守
  - 定景　満介
  - 秀国　又市郎　三井出羽守乗綱が養子
  - 女子　佐々木右衛室
  - 定興　又次郎
  - 某　豊後守高忠の養子
  - 政次　十郎左衛門　兄定春の養子
  - 高次　五郎左衛門　政次の家督を継ぐ　実は定秀が男政次が嗣となる
    - 勘八郎　民部大輔　伊勢守　従五位下　母は瀬尾小太郎某の女
    - 高政
      - 高成　摂津守　従五位下　母は義昌の女
      - 吉安　九郎左衛門
        - 高定　毛利数馬高□の祖　次郎八　母は吉田氏
        - 女子　母は某氏　松平淡路守重長の妻

浅井氏系図

- 勝政
  - 久政
    - 長政
      - 萬福丸
      - 茶々
      - 初　京極高次室
      - 小督　徳川秀忠室　家光の母
    - 女子　定秀室
    - 女子　藤堂虎高室
  - 女子

藤堂氏系図

近江国丈上郡藤堂村より起こり佐々木氏の一族高久の裔であるという。当郡在士村八幡宮に藤があり、開花の時神職がこの花を藤堂家に贈った。藤堂の名はこの藤に因んだという。

高久―景盛―景富―景持―景兼
三河守　豊後守　同　兵庫助

景高―高信―忠高―虎高
因播守　兵庫助　越後守　養子　妻は勝政の養女

高虎　佐渡守　母は浅井勝政が養女

忠高の養子　虎高は、実は三井出羽守乗綱の子であったが武田信虎(信玄)に仕え、後に浅井勝政・長政に属した。その子は和泉守。

高虎は　浅井・豊臣に歴任され、伊予宇和島八万石を領した。関ケ原役後、漸次加増があって、のち伊勢・安濃津三十二万石を領した。

以上の系図は、関係する武将の一部を抜き取り示したが、複雑で分かりにくい、しかし、母系の方から見ると比較的分かりやすい。

毛利高政の夫人　福寿院は木曽氏の出であるが、その母は武田信玄の娘であったから、高政夫人は、信玄の孫娘となる。これは、武田氏系図とも一致する。

徳川秀忠の夫人(三代将軍家光の母)は、浅井長政(信長に亡ぼされた)の娘で長姉が淀の方、その叔母は高政の祖父の妻となっていたから、徳川家とも繋がりはある。これは、藤堂家にも通ずる。

なお藤堂家と毛利家は、佐々木一族で鮣江高久を出自する同族といわれ、高虎の父虎高は、その妻を毛利氏より迎えている。したがって、高政と高虎も近い関係になる。系図を見て頂ければよくお分かりの事と思う。

石川康長

康長の先祖政康が石川氏を名乗り、本願寺蓮如上人と共に、東国に於いて真宗の布教活動を展開した。代々石川家は一向宗(真宗)の熱烈な信者であった。

康長の父数正が、豊臣秀吉から、信濃の国松本領(十万石ともいわれる)を分与されたのが天正十八年(一五九〇)で、康長は文禄元年(一五九二)十二月父数正の

遺領を相続し松本城主となった。

文禄慶長の役

朝鮮文禄の役には、石川氏は軍勢五百人を率いて出陣（朝鮮国御進発人数）した。役には、石田三成・前田利家等多くの大名が出陣している。

この年康長の父数正は、肥前名護屋に着かずして病のため死去、文禄元年（一五九二）十二月十四日、本願寺脇門跡である興正寺佐超の引導で葬儀が行われた。

康長出陣の証拠は松本正行寺文書にある（松本市史）

改易事情

慶長十八年（一六一三）十月十九日、石川康長は改易の上、豊後佐伯に配流の処分を受けた。

第一の理由は、時の総代官といわれた大久保長安の縁坐（えんざ）ということが最大の原因と松本市史は指摘している。

遺跡

石川数正・康長父子の事跡を記すと、何といっても松本城の増築を挙げなければならない。

その天主閣は堂々たるもので、当時の面影を今に伝え、松本市が誇る国宝としてその名を残している。

松本正行寺と臼杵善法寺

正行寺は真宗の寺で、康長が城下町を整備する際、武家屋敷を始めとし本町・中町・東町等の町屋敷を拡張した。その時先祖代々信仰のあった真宗寺院正行寺を栗林村より城下に移築した。

この様に康長と正行寺の関係は深い。（正行寺文書）

臼杵市史

臼杵善法寺は真宗東派の末寺（住職佐々木氏）で、開基廊玄は佐々木五郎義清の流れを汲み、松本正行寺に学び佐々木四郎高綱（法名了智）を開基とする。そして其の了智と相承する正行寺集団の門流が、臼杵善法寺開基廊玄で、この門流は瀬戸内海に面する豊後や讃岐等の寺院に多く、「ワタリ」的色彩が濃厚である。とこのように臼杵市史では述べている。

「ワタリ」とは古い言葉で、海上を往来する航海者の

事であり、山伏・木地師等のような定住を好まない職業集団の事をいう。

佐伯善教寺と松本正行寺の関係を石川康長を介して推量してみると、善教寺が古市村栗本に在って釈行念（江藤氏）の位侍の時、藩祖高政の命で大内に移り、その後現在地には冒頭に記した理由と共に移った。と佐伯市史の通り前に述べた。

康長が松本正行寺を栗本村より城下へ移築した栗の字と栗本の地名も、決して偶然に付けたものではないようである。直川の正明寺跡の栗林地名もそういう意味合いが濃い。

佐伯善教寺を栗林の地名と共に開基したその背景には、臼杵市史の指摘同様に松本正行寺の門流と見て良いのではないか。

佐々木氏族

近江国蒲生郡観音寺城を本城とし、重要な拠点に一族の城が回りを囲む、鯰江城もその一つである。

織田信長が京へ上るには、江南の佐々木一族と江北の浅井が邪魔になった。そこで先ず浅井氏を亡ぼし（信長の妹お市の方は淀の方等三人の母）江南の観音寺城も支配下におき、対峙する山頂に有名な安土城を築いた。これがのちにいう安土桃山時代の始まりである。一方、敗れた一族は三河方面や西国の毛利氏を頼って落ちて行った。

次の文書がそれを裏付けている。

鯰江三吉家系図　愛東町教育委員会鯰江系図一部分

鯰江定春は、高政の先祖叔父に当たり、現大阪備前島に大長寺を建立した人物、いわゆる大長寺殿その人である。

大長寺殿　神位

徳川氏と石川氏

佐伯史談第五十二号で佐脇貫一氏は、石川政康（石川

家中興の祖）は本願寺蓮如上人に従って、三河地方を教化し小山城主として留まり、のち松平氏に属したという人物であるとして真宗の関係を記し、康長の埋葬地に善教寺が移築された理由の一つはこの辺にあると指摘はするが、松本正行寺までは詳しく記していない。

石川康長は徳川二代将軍秀忠の側近で、関ケ原合戦の折り信州上田城攻めを共に戦った主従で、家康の康の一字を貰ったといわれ、改易とはいっても譜代の大名である。

元和二年（一六一六）家康が没した年、毛利高政の領地、日田・くすの幕府領を、康長の同族（石川氏系図参照）石川主殿頭に心良く高政は引き渡している。このことに対し、康長の配流先を気付かった幕府の情と見れば説明が成り立つであろう。

その背景には、実力者藤堂高虎の差しがねがあったものと思われてならないのだが？

その後、日田代官石川氏は伊勢の亀山六万石を領したが、そこは藤堂氏の隣領というのも決して偶然ではない。また日田石川主殿頭も康長と同様篠龍胆（ささりんどう）と石川紋である。

藤堂高虎と毛利高政

前にも系図で示した通り、高政・高虎の高は先祖高久の一字を代々付けているのを見ても同族という事がわかる。

朝鮮の役、九州島津攻め、大阪の役等常に行動を共にして戦っている間柄である。朝鮮の役では高虎に代筆まで頼んでいるほどの仲である。

その後、高虎は四国宇和島城主となり対岸の佐伯領の前領主佐伯惟定を高碌で召し抱え、その後に毛利高政が入国した。藤堂高虎でなければ出来ない手腕ともいえるが？

これは、豊後水道をはさんだ重要な位置を同族で固めたものと思う。海面も大きな領地であり、合戦の時や平時にも直ちに連絡が取れる目と鼻の宇和島・佐伯間である。

二人の文通も身内としての情がしみじみと認められて

いる。次がその文書である。

『以上

御状拝見申候、

一　言上之別帋一段可然存候之間、判を仕候て進之候事

一　備前中納言様へ今度貴所御手柄、又南原ニて様子、段々事をわけ申上候処、一段被成御感、態使者可被遣と被仰候処へ、御使者ニ候者即其通披露申候、直書を以披仰遣事

一　熊内蔵(直盛)間之儀、弥申かため候、中将へも御心底之通御物語申候、一段御とく心披成候間、可披心安事

一　小攝・福右馬・内蔵両三人前ニ而、貴所今度之御手柄様子具申候処、さ程ニ御座候つると存候間、少も御機遣候ましく候事

一　内々儀弥御分別尤候、少御ひま候ハヾ、早船に而其方へ参候か、此方へ御出候か、是非可申承候、何と哉覧、おとゝ敷計儀致迷惑候、乍去千日も懇存候ても、拙者心底ハ相違あるましく候、一入御床敷候事

一　其元御普請弥御由断可披仰付候、ゆなと候へハ、入候事ハ御無用かと存事候、いしふろ・内薬なとにて御養生尤候、猶追々可申承候、恐惶謹言、

藤佐渡(高虎)

十月十日　　高（花押）』

これら系図によって武将のつながりと、善教寺とのいきさつを小文にしたわけである。

佐伯史談第一四八号に戸山恵子氏が、武田信玄の三女真理姫と毛利氏の関係を指摘し系図にも詳しく示している。それは昭和63年発行、六年も前の事である。子息信吾君も九才、立派に成長している事と思う。如何に我々が不勉強で過ごしてきたか、悔やまれてならない。

最後に毛利の系図は前回の佐伯史談で林寅喜氏が詳しく述べているので此処では簡単に記した。

善教寺と康長・高政、各武将の絆は、中世からの豊後に於ける一向宗の流れを解明する事によって、おぼろげながら少し宛浮かんで来る。

また、高政が二度にわたってキリスト教に入信した事

実は伝導師の文献に散見するが、それに伴って佐伯領にも古くからキリスト教信者が住んでいたことも明白である。

先日、元社会教育課長だった加藤健一氏より極めて重大な事を耳にした。それは善教寺に「踏絵」があるというのであるが、何時の頃のものか不明であっても、豊後に於けるキリスト教信者を転宗させる任務を、一向宗寺院が帯びていたようである。臼杵藩がそれを物語っている。

石川康長が現善教寺に葬られるまでの28年間の生活は、一向宗徒によって支えられ日々何の不自由も無かったように思われる。近世以前の一向宗の流れを今少し解明する必要があるようだ。

以上系図に依って、武将のつながりと善教寺等の経緯（いきさつ）を小文にしたわけであるが、九州の大名達が近江・美濃・信州等の山村を出自としているのも一考を要する。

〔参考文献〕大田亮・姓氏家系大辞典
佐伯市史　他